



公益財団法人かめのり財団
第15回かめのり賞 活動報告書

令和3(2021)年度 第15回かめのり賞 受賞者(敬称略)

【かめのり大賞 草の根部門】

認定特定非営利活動法人 Hope and Faith International

【かめのり大賞 人材育成部門】

認定特定非営利活動法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

【かめのりさきがけ賞】

DAWN(Development Action for Women Network)

(女性の自立のためのネットワーク)

【かめのり特別賞】

特定非営利活動法人わびねす

活動報告書

1. かめのり賞受賞回： 第 15 回かめのり大賞一草の根部門

2. 団体名： 認定特定非営利活動法人 Hope and Faith International

3. 活動目的： 貧困など社会的援護を必要とする人々（主として子ども）が、新しい希望と信頼をもって自立していく、また貧困を生み出さない生活共同体を実現させていくための、教育的・福祉的援助を行います。その理念をもとに、現在、貧困を生み出さない地域共同体の開発として、フィリピンではミシンプロジェクト、ネパールでは養山羊プロジェクトを展開しています。また、国内では、日本人の青年の国際協力に対する啓発活動も行っています。

①活動奨励金の活用方法

どのような事業に活かしたか→

- 1) フィリピンの障がい児者の為のデイケアセンター（ミシンプロジェクト）の設備投資
- 2) ネパール養山羊プロジェクト

活動のどのような部分に活かしたか→

- 1) 主にミシンの購入、必要な端切れの購入、参加者への茶菓代などの為に活用しました。
- 2) ネパールの山羊プロジェクトの活動費の一部として活用しました。

②かめのり賞受賞後の事業活動の内容・功績

活動奨励金を活かした具体的な事業

【就学支援】フィリピン、ネパールのサポートチャイルドの就学生活支援（約50名）を行いました。

【コロナ緊急支援】フィリピンには食糧支援、ネパールには通信費を特別に支援しました。

【環境開発】フィリピンの障がい児者の為のケアセンターへ設備投資の為に支援金を支給しました。ネパール山間部の診療所へ超音波エコーなど医療機器を提供しました。養山羊による生計向上プロジェクトの実施（山羊の貸し出し、飼育訓練、見守り報告）を行っています。

【国内】青年の為に国際協力意識向上のための啓発活動として地域の学生による、外貨仕分けボランティアを対面式（約25名参加）で行いました。英文翻訳ボランティア（9名参加）はオンラインにて行いました。

特に力を入れている活動など

ネパールでは、養山羊の技術指導による生計向上プロジェクトを2021年度より続けて行っておりますが、今年は15農家を指導しています。今後は山羊の生存率よりも、体格をよくする為に、飼料や牧草の種類や与え方などを工夫していく予定です。将来的には、このプロジェクトが地場産業となり、男性の出稼ぎ率を低くし、子どもの養育環境をも向上させていくことが目標です。

③現在(または今後)計画している事業

今後の展望やアピールしたいことなど

フィリピン、ネパール共に、自分たちで自分たちの貧困の課題を解決できる、持続可能な共同体開発を実現していきたいと考えています。つまり、外国の支援をあてにせず、各地域が自立的、主体的にそれぞれの地域社会の課題に取り組むようにサポートしてまいります。2022年、23年度、フィリピンではケアセンターを拡大し、フィリピン雑巾以外の手工芸の開発を目指します。ネパールでは、同地域で加工品などの副産物を開発する他、隣村に、経験交流で、同様の養山羊による生計向上プログラムを伝播させることができるようになるのが目標です。

ネパール就学生活支援→

HFI の支援を受けているヌワコット村の子ども達。



←フィリピン食料支援

プレゼントや 10K のお米、食料品、などを受け取った親子の様子 (HFI が支援している約 50 家族全部)

ネパール医療機器支援→

超音波エコーなどを診療所 (2 か所あります) の前で受けとっているところ



←フィリピン

障がい児者の為のケアセンターでフィリピン雑巾づくりの作業をしている様子

ネパール山羊プロジェクト→

2022 年度参加している 5 農家の人たち、昨年度合わせると 15 農家参加



←ネパール山羊プロジェクト

今年生まれた赤ちゃん山羊と参加農家の人

かめのり賞活動報告書

1. かめのり賞受賞回：第 15 回かめのり大賞 人材育成部門

2. 団体名：認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

3. 活動目的：

地域の子どもの、地域が見守り、学びや暮らしを有機的に支えるネットワークをつくり、子どもの未来を明るく変えていきたいと願っています。ここ数年増加の一途をたどる外国にルーツをもつ子ども達は、自分が育ってきた環境からいきなり、言葉も文化も違う日本での暮らしに戸惑いながらも必死に居場所を探しています。しかし言葉の壁により、思いのたけを伝えることはなかなか困難です。昼夜働く親に代わって、家事や子守を引き受けている子も多く、部活や地域活動への参加をあきらめる子もいます。そういった外国ルーツの子ども達が、WAKUWAKU が展開するさまざまなカタチの居場所を通じて、信頼できるおとなや若者につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性があると思っています。

4. 活動奨励金の活用方法

① 外国ルーツの子どもの居場所活動—WAKUWAKU×ルーツ（クロスルーツ）—

オンライン中心だったが、コロナの状況を見ながら対面の活動を整えていきたいと模索してきた。しかし、検討するたびコロナ感染の増加が繰り返されてしまい継続的な対面活動に至れなかった。今後も引き続き検討し、場所の使用料、人件費、諸経費に活用させていただければと考えている。

2022 年度にスタッフの入れ替わりがあったが、WAKUWAKU に子どものころから関わり、今春大学生になった子が通訳として活躍している。また進路相談会でも先輩たちが具体的な経験を話してくれた。彼らにとっても自信となり、また聞いている子どもには途中来日の先輩の体験を聞くことで、学校ではなかなか理解してもらえない不安を共有することができた。このような際の人件費にも使わせていただいた。

② WAKUWAKU 勉強会

ここ 2～3 年、外国ルーツの子どもの参加が顕著である。日本語指導の講習を受講しているボランティアもいるが、それではとても追いつかない人数の外国ルー

ツ児童が参加している。そのため、児童向け日本語指導の教科書、会話練習教科書、漢字習得の練習帳、母語による絵本など新たに開始した外国ルーツの子どもに、ボランティアが安心して学習支援を行えるための環境作りに活用させていただいた。

また休日に江戸東京博物館に行き、今住んでいる東京のかつての姿にふれるなど、親から教えてもらいにくいというハンディがある面をカバーするような機会を提供する際、活用させていただいた。

③ すまいサポート事業

外国ルーツ家庭、とりわけアジア系家庭でビザが安定的でない家庭の場合、居住探しは相当困難である。WAKUWAKU が一緒に不動産会社に行くことで、NPO のサポートがあるならと安心していただき、きちんとした物件を案内してもらえるようになってきた。家が決まったあとも、隣近所や大家さんとの付き合い方など伴走を継続することで、地域住民と外国ルーツ家庭のトラブルが起きることなく、隣人として迎えやすいコミュニティづくりをすすめている。

④ 学校見学同行サポート

進学を控えた外国ルーツ家庭の子どもの苦勞として、将来に大きな影響をもたらす進学についての情報を的確に把握すること、家庭内で相談すること、これらが非常に困難であるということが挙げられる。

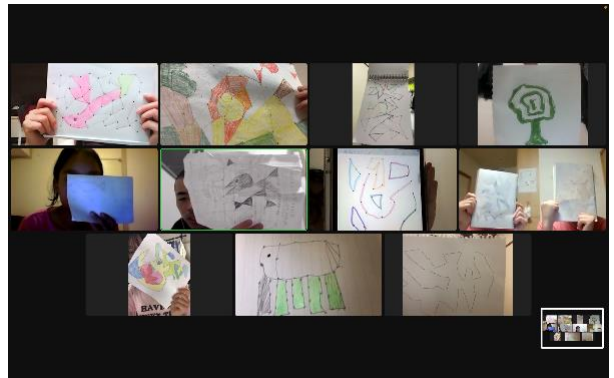
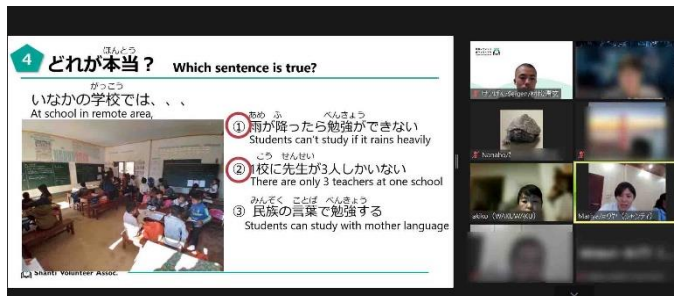
夏休み頃から各高校や大学で学校説明会やオープンキャンパスが行われる。親がそういった場で話される日本語や、渡されるプリントを理解することは極めて困難であり、子どももまた受験用語など初めて聞く言葉も多いために十分な把握をしにくい。そのため、クロスルーツスタッフや勉強会ボランティアが手分けして説明会などに同行した。

⑤ 文化芸術体験

NPO 法人芸術家と子どもたち主催のダンスワークショップに小学生から中学生の子どもが参加した。毎月1回地域の集会室にてアーティストとともにダンスパフォーマンスを創った。発表会では、子ども食堂や学習支援でつながる地域の方々、WAKUWAKU ホームでともに過ごしている仲間も駆けつけた。もちろん子どもたちの親御さんも参加した。豊かな表現力でエネルギッシュなダンスを見せてくれた小学生、ネパールの音楽に合わせて踊る中学生の笑顔は、他の居場所では見ることができない表情であった。会場からは大きな拍手がわきおこった。

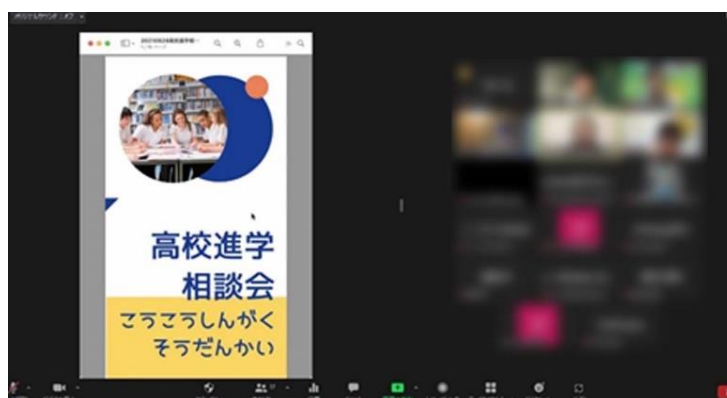
外国ルーツの子どもの居場所活動 —WAKUWAKU×ルーツ（クロスルーツ）—

オンラインで開催



「WAKUWAKU 勉強会」 江戸東京博物館を見学した様子

文化芸術体験にてダンスパフォーマンスの様子



「学校見学同行サポート」オンラインで高校進学相談会をおこなった時の様子

活動報告書

1. かめのり賞受賞回： 第 15 回かめのりさきがけ賞
2. DAWN(Development Action for Women Network) (女性の自立のためのネットワーク)
3. 活動目的： 1996 年にマニラで設立。「興行」ビザで来日し、人身売買とも呼ばれる形で働いた後に帰国した、移住フィリピン人女性への職業訓練と自立生計支援を行ってきました。移住女性とその子どもである JFC（日比国際児）が、「被害者」から「社会に働きかける存在へ」と変化するプロセスを支援しています。

4. 活動奨励金の活用方法

かめのりさきがけ賞活動奨励金を活用して、以下のプログラムを実施しました。

<カウンセリングとライフ・コーチング>

DAWN では帰国した移住女性とその子ども（若者を含む）たちに対してカウンセリングやライフ・コーチングをこれまでも行ってきました。特に今年度は、フェミニスト視点からのカウンセリングやコーチングを、女性と若者を対象にし、専門家を講師として招いて実施することができました。プログラムは、グループワークと個別セッションの両方の形態で行いました。

<自立生計支援>

帰国した移住女性のための自立生計プロジェクト「シクハイ」のプログラムでは、センター・ベースの活動（縫製と手織り）を、コロナ禍の中でも続けてきました。今年度は、さらに新規参加の女性たち 6 名に対して、縫製と手織りの基礎的な技術訓練を、専門家を講師として招いて実施したほか、「シクハイ」のメンバーに対して技術指導者になるための訓練を実施することができました。

<コロナ後のメンバー間のチーム・ビルディング>

コロナ禍の中でも DAWN はメンバーである女性と JFC の若者たちとの交流を続けてきましたが、今年度は活動奨励金を活用して、以下のようなチーム・ビルディングのイベントを行うことができました。一つは、2022 年 2 月 12 日の 26 周年の記念集会（テーマ「ニュー・ノーマルの中で女性と若者をエンパワーしよう」）、もう一つは 5 月 7 日の母の日の集いです。こうした機会を通して、コロナ禍を乗り越えたお互いを労い、チームとしての結束を強めることができました。

5. かめのり賞受賞後の事業活動の内容・功績

＜フィリピン貿易産業省との協力による自立生計プロジェクトの拡大＞

フィリピン貿易産業省（Department of Trade and Industry）の Shared Service Facilities (SSF)プログラムの助成を受け、新たに手織り機、縫製用ミシン、縁かがり用ミシンなどを新たに導入することができました。これにより、さらに多くの帰国女性たち、特にパンデミック後に帰国した女性たちに対して、技術訓練と自立生計支援を行うことが可能となります。

＜帰国した移住女性のエンパワーメントのための連携の拡大＞

在マニラ英国大使館とのパートナーシップの下、ソーシャル・サービスと自立生計支援についてのウェビナーを開催しました。（2022年1月14日、21日、28日）海外労働からの帰国者への経済的支援、政府機関との連携のあり方などについて、議論する機会となりました。

また、3月28日と30日には、UN Women と連携して、「移住女性労働者の能力開発とコミュニティの役割」および「移住女性と地方自治体やNGOとの対話：健康、公正とソーシャル・サービスについて」のテーマでウェビナーを開催しました。

さらに、マニラ市の「ジェンダーと開発」事務所主催の第1回マニラ女性サミットにも参加し、広くコミュニティにおける帰国移住女性のエンパワーメントについて議論の場を作ることができました。

6. 現在(または今後)計画している事業

現在、女性と JFC メンバーおよびスタッフ向けに、以下のような訓練プログラムを計画しています。

- ・ Australian Volunteer International (AVI)から講師を招いての、コンピューター・スキル・トレーニング（MS Word, MS Excel, MS PowerPoint, Social Media, Canva などの各種ソフトの使用方法について）（2022年9月～12月）
- ・ 専門家を招いての、データベースの開発およびメンテナンスについてのトレーニング。（2022年12月）

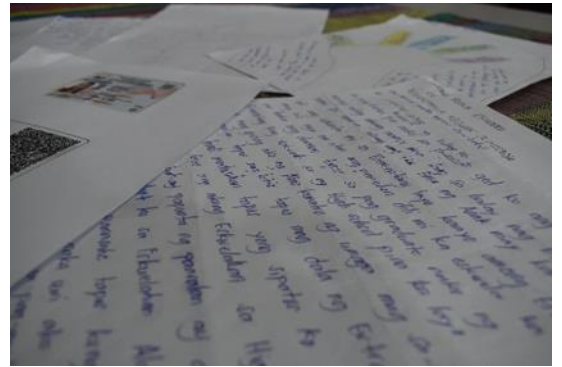
また、「シクハイ」プログラムに新たに導入された設備を活用した新規技術訓練の拡大についても計画しているほか、在マニラ英国大使館とのパートナーシップで、「人身取引の対象となった移住女性とその子どもたちの再統合のための包括的アプローチ」プロジェクト（2022年11月～3月）も実施していきます。



26周年のチーム・ビルディング
(2022年2月12日)



母の日のチーム・ビルディング
(2022年5月7日)



ライフ・コーチングのワークショップの様子
「シクハイ」トレーニングの様子



活動報告書

1. **かめのり賞受賞回** 第15回かめのり賞 かめのり特別賞
2. **団体名** 特定非営利活動法人わびねす
3. **活動目的**：NPO 法人わびねすは、ハンセン病快復者を含むすべての人々が「いきいきわくわく」暮らすことのできる社会を目指し、ワークキャンプ事業/就労支援事業/教育事業を展開している。差別に苦しむ人々とのコミュニケーションを通じて「私とあなた」という対等な関係を構築し、彼らが抱える被差別意識を内側から和らげるとともに、社会が孕む差別意識の改善に取り組むことで、心豊かに生きるために必要な尊厳の獲得を図る。

4. **活動奨励金の活用方法** 下記の事業で活用させていただきました。

- ・就労支援事業 – TOTO メンテナンス費用
- ・就労支援事業 – 口腔ケアプロジェクト 事後調査の通訳費用
- ・ワークキャンプ事業 – 村人史プロジェクト インタビュー通訳費用
- ・ワークキャンプ事業 – 現地対応職員派遣費用

5. **かめのり賞受賞後の事業活動の内容・実績と今後について**

5-1. **ワークキャンプ事業**

【事業概要】

3月と9月の年2回、日本人学生約20～30名がハンセン病コロニー（村）に2週間ほど泊まり込み、コロニーが抱える問題を解決する合宿型の活動（ワークキャンプ）。居住環境の改善を目的としたインフラ整備を軸に、村人と共同生活を行う。

尚、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2020年3月以降ワークキャンプ活動は休止中。現在、2023年3月のワークキャンプ再開に向け協議を進めている。

2021年以降、ハンセン病の歴史の伝承と村人との関係性維持を目的とする「村人史作成プロジェクト」を実施した。

【かめのり賞受賞後の事業活動内容・実績】

・村人史プロジェクト

ハンセン病コロニーに住む人々の個人史(=村人史)を聞き取り記録する「村人史プロジェクト」を始動。2022年は2名に対してオンラインインタビューを実施した。ハンセン病コロニーに来た経緯や一日の過ごし方について話を聞くことができた。ハンセン病快復者の人生記録を残すことは重要な意義を伴うものとするため、今後も取り組みを継続する。

・緊急支援基金

ハンセン病コロニーに住む村人への支援基金を設立した。病気や怪我により入院を余儀なくされた方/家庭を対象に、一時的にお見舞金を給付する。働けないことで収入が途絶えてしまった家計を支え、医療費の負担を軽減することを目的とする。2022年7月、基金設立後初となるお見舞金（Rs.3,000）をビシュナプールコロニーの家庭へお渡しした。

5-2. 就労支援事業

【事業概要】

就労支援事業では、TOTO レンタルプロジェクトとマイクロローンに取り組んでいる。TOTO レンタルプロジェクトでは、コロニー在住の村人を対象に TOTO（電動3輪自動車）を有償レンタルし、比較的安定した収入が期待できるタクシー業務への従事を支援する。マイクロローンでは、金融サービスを利用することができないハンセン病コロニーの人々を対象に、事業資金の融資を実施する。これらの取り組みを通して、ハンセン病コロニーの人々が物乞いに頼らずに生活できる社会の実現を目指す。尚、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、現在はレンタル料やローンの回収を停止している。2022年は上記2プロジェクトに加え、2019年に実施した口腔ケアプロジェクトの事後調査を行った。

【かめのり賞受賞後の事業活動内容・実績】

・TOTO レンタルプロジェクト, マイクロローン

活動奨励金を活用し、TOTO13台のバッテリーとタイヤの交換を実施することができた。TOTO ドライバーの収入は徐々にコロナ以前の状況に戻りつつある。感染拡大直後は全く仕事ができない状態（収入Rs. 0~100/日=0~170円/日）であったが、現在は少しずつ仕事ができる状態（Rs. 150~300/日=255~510円）となっていることが聞き取り調査から確認できた。

今後は、TOTO ドライバーに対する収入状況のモニタリングを実施、当初設定したレンタル料の返済をフォローしていく（必要に応じて減免を検討予定）。マイクロローンに関しては、今後の返済計画をコロニーの人々と共に策定していく。

・口腔ケアプロジェクト

2019年度に口腔ケアの啓発活動を行ったマニプールを含めた3コロニー105世帯（※）を対象に、口腔内の問題、歯磨き、身体の不調などについてヒアリング調査を実施。

※ 対象ハンセン病コロニー：ビシュナプール、マニプール、ナバジバンプール

回答人数：501人 平均世帯月収：Rs. 6,250 =約 10,597円

調査の結果、全員が「毎日歯磨きをしている」と回答したものの、歯磨きの回数は1日1回が79%、2回は約21%と、毎食後に磨く習慣は無いことが分かった。また、501人中73人が虫歯や咀嚼困難等、口内環境に問題を抱えていることから、口腔ケアが十分とは言えない状況と判断した。今後も口腔ケアに関する啓発プログラムを継続していく。

5-3. 教育事業

【事業概要】

学生ボランティアメンバーを中心に国内のハンセン病療養所を訪問し、療養所に住む方々との交流を行う他、国内外の大学や小学校での講演を行っている。学生がハンセン病問題に触れる機会を設け、豊かな人間性をもった人材を育成する。2022年はインドハンセン病コロニーが抱える教育問題に目を向け、現地へ絵本を送り読み聞かせを実施する「図書館プロジェクト」を始動した。

【かめのり賞受賞後の事業活動内容・実績】

・国内ハンセン病療養所訪問

2022年5月に国立多磨全生園を訪問。学生メンバー7名が参加した。国立ハンセン病資料館を見学し、日本におけるハンセン病の歴史や療養所での生活、差別との闘いの軌跡を学ぶことができた。今後も、ハンセン病問題に対する認識を深め、活動のありかたを考える機会を提供する。

・図書館プロジェクト

コロナ禍で学校へ行く機会が少なくなってしまったコロニーの子どもたちに、文字に触れる機会を増やしてもらうため、日本から絵本を送る「図書館プロジェクト」を始動。学生ボランティアメンバーと共同で取り組んでいる。2022年10月までに、2コロニー（マニプール、ビシュナプール）へ各11冊を届けることができた。なお、絵本は認定NPO法人ESAアジア教育支援の会様より購入した翻訳シートを用いてベンガル語へ翻訳した。今後はオンラインでの読み聞かせを実施する予定。定期的に子どもたちへ読み聞かせを行い、本への親しみを深めてもらうことで、読書習慣が定着している状態を目指す。

6. 参考写真



村人史インタビューの様子



口腔ケアプロジェクト事後調査



TOTO バッテリー交換の様子と
修理が必要な座席シート



国立ハンセン病療養所訪問



ベンガル語へ翻訳した
日本の絵本